

International Symposium on Occupational and Environmental Allergy and Immune Diseases 2010 (ISOEAID'10) in KYOTO, JAPAN 終了報告書

—桜満開賀茂の流れも穏やかに—

Local Organizer 川崎医科大学

衛生学 大槻 剛巳 (6期)

春の到来を告げる風は、例年よりも早く列島を駆け抜けて行き、弥生半ばに桜の便りがあちこちから舞い込んでくる様な2010年の初春でした。



「京都で桜が観たい」という Prof. Mario Di Gioacchino (Prof. di Medicina del Lavoro ed Allergologia, Università “G. d’Annunzio”, Chieti, Italy) の一言で、4月初旬に京都で開催を決めた International Symposium on Occupational and Environmental Allergy and Immune Diseases 2010 (ISOEAID'10) なのですが、本当に彼の望み通りに桜を愛でる時期になってくれるのか…相当に心配な日々でした。

と、唐突に弥生の気がかりを書き始めても、読んで下さっている同窓の皆さまには訳が判らないかと思えます。

川崎医科大学同窓会よりの助成と表紙裏の広告を頂戴して、私が Local Organizer という立場で去る 2010年4月9日から11日に京大会館にて国際シンポジウム「ISOEAID'10 in KYOTO」を開催させていただきました。ここに改めて同窓会からのご援助に深謝いたします。本当にありがとうございました。

さて、今回の国際シンポジウムはどのようなものであったのか、ということ、まずは説明しなくてはなりません。私の所属しております衛生学を含め、

公衆衛生学、健康科学、健康増進学、予防医学、環境医学などと呼ばれております一連の領域の中では、産業衛生～労働衛生というの、一つの大きな実践ならびに研究の重要な課題となっております。日本でも日本産業衛生学会がございまして、同窓の先生方の中にも産業医として嘱託で、あるいは専任で御活躍の先生も多いかと存じます。

産業衛生領域の世界的な活動機関の一つに、国際労働衛生委員会 (International Commission on Occupational Health: ICOH) があります。WHO や ILO と協調しながら労働衛生について3年に一度の総会を設けながら、多くの分科会によって構成され、それぞれメンタルヘルス、リスク管理、騒音、産業中毒、その他諸々の労働衛生の問題点を改善すべく取り組んでいる機関です。

私はその中のアレルギー免疫毒性分科会 (Allergy & Immunotoxicology scientific committee) に所属しておりますが、本分科会は、本年4月からは、それまで Secretary General でいらっしやった Italy の Chieti にあります Università “G. d’Annunzio” の Mario Di Gioacchino 教授が chair に就任され、Secretary を私が拝命いたしました。

本分科会では、ICOH 総会 (2012年にメキシコでの開催が次です、振り返ると2009年に南アフリカ、2006年にイタリアのミラノ、2003年はブラジルのイグアス、2000年がシンガポールといった具合です) の合間に、世界各国でアレルギー免疫毒性学のシンポジウムを行っておりまして、これまでもイタリアや中国、また2005年には熊本大学上田厚教授が会長を務められて熊本市で実施されてまいりました。また、2009年にはICOH 会長に日本人から初めて労働衛生研究所の小木和孝先生が御就任になられたこともあり、日本で開催することになりました。

そして、でもここに至るまでは結構バタバタで、2009年の6月に Chair の Gioacchino 教授のいらっしや

るUniversita "G. d'Annunzio" が北里大学と姉妹校
っていか教育研究の連携校提携を組み交わされる
ために、来日されたことで、港区白金の北里大学の
白金キャンパス（薬学部や研究所病院があります）
で打ち合わせ会が設けられ、まあその頃から漠然と
日本で開催しましょう、そして、一応Secretaryを私
が務めることになっていましたので、大槻がLocal
Organizerは務めましょうというニュアンスではあ
ったのですが、出来れば、今年の秋頃にでも倉敷で
（美観地区もありますし、海外の研究者を招くには
適切かなとも思っていたのです）開催くらいでいい
のかなって思っていました。

処が、その段になって、冒頭にも記しましたが
Gioacchino教授から「京都で桜が観たい」発言！
これで準備期間も1年未満で京都で桜を鑑賞できる
時期になってことが決定事項になってしまいました。

さて、そこからが本当にバタバタの準備になりま
した。ICOHの総会は世界各国から相当数の研究者
あるいは労働衛生の実務を担当される職種の方々、
勿論役所関係の人々なども集まれるのですが、ア
レルギーと免疫毒性の分科会は、おもに欧州の研究
者と日本の研究者を主体にこれまでも実施してきた
経緯があります（設立時のChairは鹿児島大学名誉
教授の松下敏夫先生です）。ですので、宝が池
（元々、借料も高いと聞いておりましたし）は端っ
から考えてはいなかったのですが、では他にとい
うとなかなか良い場所がない…どうしようかって思
っていたら、またまたGioacchino教授から「京大会館」
で以前会に参加したことがあり、そこを希望する
っていうメッセージが届きました。私も別の会で京大
会館での研究会に参加した経験もありましたので、
それはそれでよかったです、そこから急いで電
話をして予約を入れ、それも桜満開の時期になる様
にということで…ただ、その時期って日本の大学の
先生方には年度初めで入学式だのなんだのとっても
御多忙の時期なのですが…なんとか4月9～11日と
決定したのでした。

それでも海外からの研究者を招待したりするの
に、丁度、その時期の京都は桜観光の時期で、宿泊
施設もその1週間だけは割増料金だとか、元々、な
かなか押さえられないとか…本当に問題山積み、お
まけに、倉敷や岡山ならば気軽に時間が空いた時に
打ち合わせなどにも行けますが、京都というところ
もいかないとか、まあ、なんだか大変でした。

それでも参加者、それぞれの抄録も集めることも

出来たのが2月の末くらい、その後も、中国からの
研究者に関してのVISAの問題も出てきますし、こち
らが依頼した旅行代理店からの航空券ではイタリア
のグループが満足されなかつたりとか、諸々——。
なんだか、バタバタとメールで作業を繰り返す日々
でした。

加えて、3月に入ってもアフリカから参加を希望
する研究者がメールを下されたのですが、郵便事情
が悪かったり、VISA申請について、きっと申し込ん
で来られた研究者の方々は欧州に行くくらいの気持
ちでその時期に申し出られたのでしょね（詳しく
は知りませんが）、日本のVISAの発行にはとって
も時間がかかり、こちらが書くべき書類も沢山ある
こともあまり御存知なく……なんだかんだと、マリ
ヤガーナの領事館の方ともメールを繰り返すって
ことを直前まで繰り返しましたが、結局、残念ながら
アフリカからの参加者にはVISAが間に合わず、来
てもらえることが出来ないなんてこともありました。

さて、そうこうしている3月半ば…冒頭に記しま
した様に、日本各地で桜がどんどん咲いてきてい
るってことで「京都で桜が観たい」というGioacchino
教授の願いは、どうも開催時期には葉桜になって
しまうのでは…という危惧がだんだん膨らんでしま
した。

しかし、当日の4月7日、京都に行ってみて、会
場の京大会館近くの賀茂川縁を歩いてみるとまさに
満開の桜！ 3月下旬が結構冷え込んだ上、雨も少
なかったのが、桜を長持ちさせた原因だと思います
が、本当に嬉しく思いました。



さて7日はICOH会長の小木先生のOpening
Remarkでした。労働衛生全般に渡って、そして日
本がどのように貢献出来るかといった内容で、興味
深いお話でした。



その夜はWelcome Partyでした。簡単な立食形式です。



大槻が参加しております厚生労働省科学研究班：労働安全衛生総合研究事業「化学物質の国際調和分類基準（GHS）に対応した感作性化学物質リスト作りとその応用による化学物質の安全使用」の先生方も、オランダからの研究者も含めて参加して下さいました。

そして2日目の4月8日からはシンポジウムの開催で、最初はGioacchino教授で呼吸器アレルギー全般のKeynote Speechでした。



その後、日本のそして欧州を中心とした研究者か

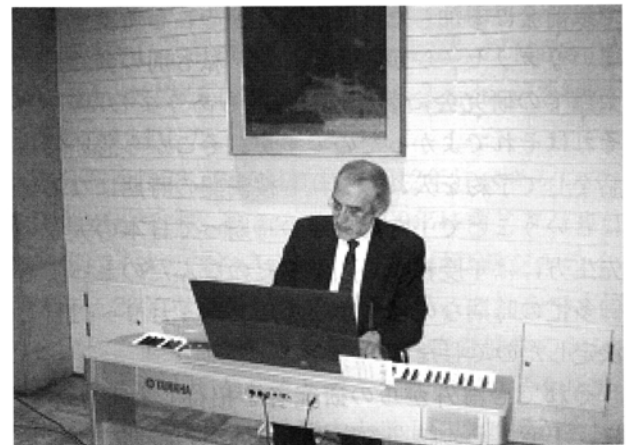
らの気道・皮膚のアレルギーの問題、化学物質（感作性物質を含む）の国際調和分類基準（GHS）に関連する話題、あるいはライフスタイルと免疫アレルギーの問題などが発表、討議されました。

加えてランチョンセミナーとして大槻が我々の教室で研究している「シリカ・アスベストの免疫影響」について講演を致しました。

この日の夜はReception。京大会館内のレストランで着席でのディナーにしました。そしてエンタテインメントは、この同窓会報でも紹介させていただいた自主制作CDの曲とともに、2006年に日本免疫毒性学会というのを主催した際に、外国からのお客さまもいらっしゃったので、英語の歌詞で作った日本免疫毒性学会学術集会のテーマソングがあったので、その両方を披露しました。



そしたら、Gioacchino教授もピアノを弾かれるということで、即興で「枯葉」などを弾かれ始めました。



さらに、これは目論んでいたのですが、予め、サンタルチアとかオーソレミオの譜面を用意していて、そのイントロを奏で始めたら、さすが、イタリア人達は唄うのが大好き、みんなで集まってきて大合唱になりました。サンタ~~~~~ル・チアア~~~~。



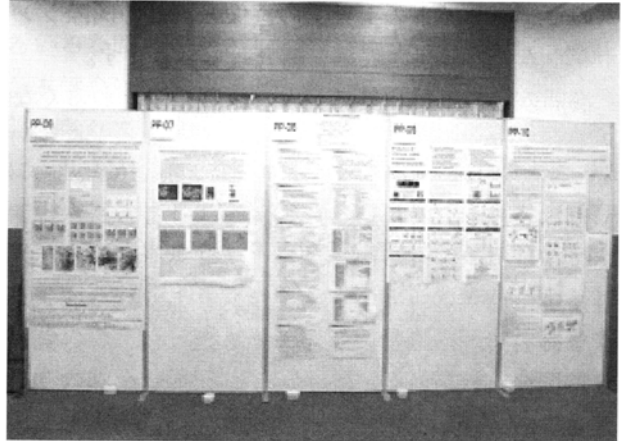
さて、そんなこんなで最終日、多くのkeynote SpeechやSpecial Lectureがありました。ナノ粒子の問題、大気汚染とアレルギーの問題、室内環境や空気質あるいは感作性物質の検査法の問題などを沢山勉強致しました。加えてランチョンセミナーでは、このシンポジウムを支援して下さったヤクルト株式会社の提供によってプロバイオティクスとアレルギーの問題の日本およびイタリアの調査研究が報告され、これも非常に興味深い内容でした。



あるいは川崎医大でも2008年にセミナーをして下さった中国・山西医科大学の牛先生もご講演を頂きました。牛先生はイタリアへの留学経験があるようで今回集まった欧州からの研究者とも親しくアルミニウムについての講演をして下さいました。



ポスターセッションには日本の若い先生方が演題を出して下さいました。このシンポジウムはICOHの分科会としてのアレルギー・免疫毒性部門の主催ですが、日本で私が関わっている学会としては日本免疫毒性学会という会があって事務局を務めております。また日本産業衛生学会の中にもアレルギー・免疫毒性研究会という分科会もありますし、今回、演題を寄せて下さった日本の若手の先生方には、これら両方の学研究会でも、是非、ご活躍頂きたいと思っております。



さて、そんな感じで二日半の国際シンポジウムもそれでも大過なく終了することができました。Local Organizerからの参加者へのお土産はTシャツや小さい金箔のブックマークなどとさせて頂きました。



さて、実はまだこの国際シンポジウムにまつわる仕事は残っていて、ここで発表していただいたいくつかの講演の中から原稿を募って、Giacchino教授が編集副委員長をされているInternational Journal of Immunopathology and Pharmacologyの別冊特集号として発刊する予定になっています。今、丁度原稿集めに必死になっている最中です（もちろん、大槻は既に投稿済みですが）。

準備期間が1年未満ということもあって、とってもバタバタとしたままで突入したシンポジウムでしたが、参加して下さったすべての皆様のご協力、そして教室スタッフの努力、手伝って下さったコンベンション会社や旅行代理店のスタッフの方々の援助、そして川崎医科大学同窓会からの経済的なご支援なども合わさって、参加して下さった海外からの先生方からも「とっても良い会だったよ」と言って下さいました。本当にありがとうございました。

さて、最後にお礼とともに、手作りのシンポジウムのウェブサイトのトップの画像と、この国際シンポジウムの抄録集の表紙を紹介しておきます。

満開の桜の下で和装の少女が微笑む姿。わるくな



いでしょう？

ご支援、本当にありがとうございました。改めて感謝いたします。

